

川端康成「化粧」の解釈学

小 埜 裕 二 *

(平成十八年九月二十八日受付)
(平成十八年十一月八日受理)

要 旨

言葉の意味や背景を丹念に読み込んでいく伝統的な解釈方法のほかに、テキストの読みを深める新しい方法があるだろうか。新しい研究方法の実効性や汎用性を知ることを通じて、解釈学的研究の広さと深さにふれることができるなら、テキスト解釈にむかうわれわれの接近の仕方も違ってくるだろう。本研究では、川端康成「化粧」のテキストに対して新しい解釈学的研究方法を適用し、具体的な読み方を示した。

KEY WORDS

解釈学 hermeneutics research 間テクスト性 intertextuality 他者 other 文学の政治性 political characteristic of literature

一 解釈学的研究

文学研究には詩学と解釈学の区別がある¹⁾。テキストの意味を新しく見いだしていこうとする解釈学的研究が文学研究の多数を占めるのはいうまでもないが、詩学的研究が言語学的知見をもち、フランス構造主義思想とかわることで隆盛を見たことは周知のとおりである。テキストの意味の由来や効果、構造を説明しようとする詩学的研究はたしかに実効的で魅力がある。かつて「川端康成「化粧」の表現機構(2)」²⁾において、私はこの詩学的研究のうち、ロバート・スコールズの記号論的研究の適用とジェ

ラル・ジュネットのナラトロジー研究の適用を「化粧」(「文芸春秋」昭和七年四月号)のテキストをもとに考えてみた。ジョナサン・カラーが言うように、実際には詩学的研究と解釈学的研究は、両方が併用されて研究が進められている³⁾。先の拙論においても詩学的研究方法が新たな解釈を呼びこむことを期待したところは少なからずある。

今回、考察したいのは、「化粧」をテキストにした解釈学的研究の新たな適用である。解釈学はテキストの読みを更新する。そのため言語学的知見よりも哲学や社会学等の人文科学の知見が有

* 言語系教育講座

効に用いられる。だがそうした研究の総量が多いとはいえ、解釈学的研究は個々のテキスト解釈を行うにあたって、テキストごとにアプローチの方法を吟味することが多く、記号論やナラトロジーの詩学的研究が用いる万能薬的な方法を適用しにくい。しかも解釈は一定の研究成果をもつと、その成果を検証するために詩学的研究にバトンを渡す。テキストを解釈学的に読んでいくうえで、言葉の意味や関係、背景等を丹念に読みこんでいく従来の伝統的な解釈法以外に、どのような有効な観点があるのか。その観点の実効性や汎用性を知るとともに、解釈学的研究方法の広さと深さにふれることができるなら、テキスト解釈に向かうわれわれの接近の仕方も変わってくるだろう。

たとえば土田知則・青柳悦子共著『文学理論のプラクティス』⁴は、詩学的研究方法の紹介に傾きがちな研究書が多いなかで、解釈学的研究に多く目配りをし、有効な方法を具体的な作品の読解を通じて示唆してくれる。私の考えではマイナーの復権を内なるテーマにするこの著書は、現代思想の文脈をふまえ、「カオス」〈他者性〉〈トランスパーソナル〉〈オイディプスの欲望〉〈母子融合状態〉〈触覚〉〈相互嵌入〉〈マイナー文学〉等をキーワードとし、われわれが物語を解釈学的に読んでいこうとするうえでの示唆を与えてくれる。一般に、読み手は物語を〈ノモス志向型〉（テキストの意味を分かりやすい形で理解しようとする解釈傾向）で読もうとする。そうした読み方には、読み手の側の読後の安心・満足がともなう。しかし、それがテキストにあったはずのカオスを切りすて、あえて物語を単純に整理したものであるなら、もう一度、「カオス尊重型」（テキストの中のすっきりと整理できないもの、曖昧なもの、マイナーなものに注目して読む解釈）の読みを試みる必要がある。

〈カオス尊重型〉の読みは、旧来の読みかたにゆさぶりをかける。詩学的研究もその過程で新たな解釈を生みだすなら、解釈方法の一つになってくるだろう。本稿では「化粧」のテキストにいくつかの新しい読み方を適用したい。まず詩学的研究方法の解釈学的研究への応用として〈間テキスト性〉の考えをもとにした解釈を考えてみる。次に解釈学的研究の新たな適用を〈他者性〉〈オイディプスの欲望〉〈相互嵌入〉の知見をとりいれて行う。最後にテキストの社会的機能に的をしばってよむ読み方を検討したい。第一の方法は詩学と解釈学の橋わたしを、第三の方法は解釈学とテキスト論以降に隆盛をみた文化研究の橋わたしを考える一つのヒントになるものである。

二 〈間テキスト性〉

諸テキスト間の関係を問題にする〈間テキスト性〉⁵の研究は、影響関係をクロノロジカルに問うものではない。一例をあげれば、後に書かれたあるテキストが読み手にとって参照すべき有力なテキストとなっていたなら、その理解の目を通して当該テキストが読まれると考える。たとえば「シェイクスピアに対するエリオットの影響」といういささか奇矯な研究課題が成立するわけである。もともと〈間テキスト性〉についての研究は、諸テキスト間の関係のありようを説明するものであって、解釈学的研究と関わるものではなかったはずだが、種々の影響関係に目をこらすことで、今日ではテキストに新たな読みを導こうとしている。

バーバラ・ジョンソンは「材源」についての研究と〈間テキスト性〉の研究の違いを「材源についての研究が、もっぱら財産の

譲渡という観点からおこなわれる」のに対し、「〈間テキスト性〉の研究は「誤読あるいは侵犯の観点からおこなわれる」と説明している。「誤読あるいは侵犯の観点」とは、ハロルド・ブルームが『影響の不安』で説いた意味での、「特定のテキストと、それに先行するテキストとのエディプス的ライヴァル関係のなかで生ずる」ようなものを指す⁷⁾。先行テキストが与える強力な〈影響の不安〉を乗り越えるため、後代の書き手が先行テキストの「誤読」や「侵犯」をおこない、新しいテキストを作り出すという考えは、先行テキストと後続テキストの双方向的な関係にわれわれの目を向けさせる。

テキストの自律性完結性を尊重し「化粧」を単体として読んだ場合と、「〈間テキスト性〉」をふまえて諸テキスト間の関係を見さだめて読んだ場合とは、テキストの解釈にどのような違いが生じるのか。あるテキストを解釈するとき、テキストを背後で支える文化コードを参照するとこのように読めるといった読み方は可能かつ有効な方法だが、他のテキストを参照して解釈をおこなう読み方は互いのテキスト間に隣接関係にもとづく換喩的關係しかない意味で問題がのこる。諸テキスト間の交流状態を静的に見ることを越え、諸テキスト間に意味の大きな磁場を見出すようになるば、一つのテキストから読まれる意味以上の意味を読みこむことになる。そうなればテキストの「空所」を別のテキストで安易に埋めてしまうことになり、テキストを〈閉じた物語〉にしてしまいかねない。

だがこうしたなかば楽天的な解釈が真面目に模索されるのは、読者の読みの自由や、作者の無意識の世界の容認、作品の独創性への疑いが生じてきたからだけではない。「〈間テキスト性〉」を考慮した解釈手法は〈脱構築〉と密接な関係がある。テキストの意

味を固定化・特権化する「〈制度〉」化した読みと解釈に風穴を開ける一つの方法⁸⁾である〈脱構築〉的解釈はテキスト内部に様々な葛藤・矛盾を見出し、二項対立的な図式では整理できない矛盾を明るみに出す。解釈過程で切り捨てられた部分を呼びもどし、マイナーなものを切りすててきた行為に反省をうながす。それと同じ成果を求めて〈間テキスト性〉をもとにした解釈行為が注意深く模索されてきたわけである。だから少なくともテキストを〈閉じた物語〉にするのではなく、「〈開いた物語〉」にする方向で解釈は進められなければならない。

そのことに留意しつつ「化粧」が発表された初出誌に並べて掲載された川端のテキスト「顔」「妹の着物」⁹⁾に注目してみよう。「顔」は、旅役者の少女が子どもを産んだことではじめて〈他者〉を知る物語である。だが少女は、やがて子どもの父や子どもと別れたのち、子どもが父とも自分とも似ていたように思うようになる。自分が産んだ子どもの〈他者性〉を再び内なる存在へと関係づけていく少女のありようは、絆なしには生きられない人間の宿命を思わせる。一方、「妹の着物」は世間の冷たい風にあたることで「自分の失ったものを妹の上に求めてゐた姉」が、「妹の死によつてそれを自分の上に取り戻す」物語である。病気の妹の看病をする姉は、妹の着物を着て、妹と同じ髪を結うことで「まことに生き生きしい血の嵐」を感じ、失われたものを取りもどす。「顔」「妹の着物」「化粧」の三作品を並べたときに何が見えてくるのか。テキストは互いを意識しあっている。おそらく川端は女性のありよう、及び女と男の違いを、三作を通じて、より明確に描きだそうとしたのであろう。つまり、川端は〈間テキスト性〉を利用したということになる。「化粧」をよむ読者は、他の二作との対応関係を意識することでより豊かな意味作用を受けとる。

三つのテキストが描きだすのは、自己の生の孤独に対して無心でいられず、おのれの生の回復・維持をはかる女性のありようである。そのなかで差異的要素をもって登場するのが、「化粧」の「私」である。「化粧」の「私」は、結末で女性の〈他者性〉に逢着し、水を浴びたような驚きを得る。「私」が女性に対して感じとった〈他者性〉は、「顔」の少女とは反対に、「私」の中で融解されることがない。また「化粧」の「私」は見るだけであり、「妹の着物」の姉とは反対に、なにも自分の手にすることは出来ない。三つのテキストは女性が備えもっているものを描き、女性のありようと対極にある男の「私」を際立たせる。

右とはやや違った関わり方をする〈間テキスト性〉の問題にふれておきたい。「化粧」の約一年後に発表されたテキスト「禽獣」〔改造〕昭和八年七月号〕の冒頭には「化粧」にあった放鳥のエピソードがあり、結末には女性がおこなう化粧のエピソードがあり、読者がテキスト相互の関係を目をとめやすいようにつくられている。「禽獣」に登場する踊り子千花子は、「化粧」の冒頭においてすべての生きものが生のサイクルのなかで輝き萎れていく運命にあることを示していたのと同じ変化を見せる。「禽獣」の「私」は、少女であった当時の千花子が「私」に見せてくれた「虚無のありがたさ」を今も大事に持っていたと思う。しかし生きものである以上、人は変化する。野生的な美しさをもっていたときを頂点として、子どもを産んでから、千花子は肉体的にも舞踏にも生彩を欠くようになる。

それが生きものの運命であるが、人間と他の生きものの違いは、そうした生きものの運命に人間が「無心」でいられない点にある。「無心」でいられない「化粧」の「若い女」は、斎場の廁の中で化粧をした。「禽獣」の「私」が禽獣を飼うことを好むのは、

鳥達が「無心」で「明るい生命」を持ちつづけるからである。「化粧」の「私」は、おのれの生に執着する女性の〈魔女性〉を跳ねのけるために相手の死をひたすら悼む「無心」の〈聖女性〉を求めた。「禽獣」の「私」は、美しい花が無惨に枯れていくような運命に「無心」でいられない人間から目を遠ざけるために禽獣を飼いつつも、だが一方で千花子が少女の頃に示してくれた「虚無のありがたさ」を守るために「甘いもの」を見つけないと思う。

「化粧」の「私」は、女性に〈聖女性〉を求めても、それが無化される現実を見せつけられる。女性に〈聖女性〉を求めても求めえない「私」のあきらめに似た思いが作品結末部を覆っている。

一方、「禽獣」の「私」は「化粧」の「私」の女性に対する冷徹な認識を受けつぐように、生きものの宿命を知り、すでに禽獣を飼っている。だが一方で結末では千花子のために「甘いもの」を求めようとする。「禽獣」の結末には十六で死んだ少女に、少女の母が化粧をしてやるエピソードが語られるが、この化粧は、「化粧」における「若い女」の化粧とも「十七八の少女」の微笑とも異なる。死んだ少女の顔にほどこされた化粧は、母の愛が注がれた「甘いもの」である。反対に「化粧」の「若い女」の化粧や「十七八の少女」の微笑は、「甘いもの」を消し去るものであった。〈化粧〉の意味が、「甘いもの」を消し去るものから与えるものへと変更されたことが分かる。

この変化をクロノロジカルな影響関係の中で捉えるなら、「化粧」の冷徹な認識を「禽獣」が受けつぎ、「甘いもの」の表出でその冷徹な認識を緩和しようとしたと解釈できる。人間から禽獣に向けていた関心を再び人間にさし向けるわけである。しかし〈間テキスト性〉の考えから捉えれば、「化粧」と「禽獣」の二つのテキストはたがいに消しあい、たがいに生みだしあうテキストと

なる。〈影響の不安〉を与える父なるテキストを、いかに乗りこえるかといった「エディプス的ライヴァル関係」にある「化粧」「禽獣」のテキストが浮上してくる。

軽々に判断はできないが、川端は書く営みのなかで、自身の先行テキストが〈父〉となり、その意味に多大な影響を受けることを恐れたのではないか。「化粧」がそうであったように、一つのテキスト内に〈メタ性〉¹⁰の要素をもたせ、さらに複数のテキスト間で〈脱構築〉していくことが川端の方法であった。だがその結果、追究された主題がつねに発展的に継承され昇華されていく印象を川端文学はもたない。むしろ堂々めぐりの印象を与えるのは、メタ性がそれまでのテキストを呑みこむかたちをとりながら、それがウロボロスのようにやがて同じ問題の尻尾を呑みこむ繰り返りかえしになっているからではないか。哀しみをかみしめ、そこから離れようとするが、やがてまたその哀しみに戻りつくのである。

三 「私」の内なる〈他者性〉

「化粧」の「私」は、最初は女性がもつ〈魔女性〉を認めようとする。しかし次にはそれを否認する¹¹。〈魔女性〉に「十七八の少女」の涙という〈聖女性〉を対置することでおのれの揺れさだまらぬ心を安定させようとするが、その志向も「十七八の少女」の微笑によって覆される。その意味で「化粧」は「私」の心の中にある收拾のつかないカオス的要素、言い換えれば「私」の内なる〈他者性〉¹²に翻弄される物語といえる。「私」は女性の〈魔女性〉を認めることができない。「私」は「私には謎の笑ひである」と考えることで、テキストにいちおうの決着をつけるが、「私」のうちで働く心の動きは、おだやかなものではなかったはずであ

る。

「化粧」の「私」は物語世界内にいるものの、「若い女」と顔を合わせることがなく、一方的に彼女達を観察している意味で、ミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』の語りのありようと似る¹³。しかしながら「化粧」の「私」は、クンデラの物語とは反対に、「若い女」や「十七八の少女」が廁の中で「鏡」を前にしておこなう化粧や笑顔の意味を彼女達のそのときの思いに身を寄せ、共感的に受けとろうとはしない。彼女達のもつ〈他者性〉への理解を介して、そこから自分自身を発見していくこうとする思いは「私」にはない。〈トランスパーソナル〉¹⁴な体験の場として「化粧」のテキストがあるわけではない。「私」は若い女達を持っている、「私」には理解しがたい〈他者性〉を見つめることなく、自分がこうあつてほしいと願う女性像をおのれの井桁のなかに流しこもうとする。

では「化粧」の「私」はトルストイの語り手のように「対話者である「他者」を欠いた自己完結的な世界のなかで、最終的な鍵を握るただ一つの絶対的な認識主体として語っている」¹⁵だけなのか。たしかに「私」は「若い女」と会話をしない。「若い女」について語っているだけである。だが「私」は結末で「十七八の少女」の「微笑」を見て「水を浴びたやうな驚き」で身を震わせる。「私」という語り手を登場させることで、「化粧」のテキストは最終的には相手の〈他者性〉に逢着する。若い女達に〈聖女性〉を見出したいという願望をもちながらも、期待を裏切られる「私」は、それにより人間相互あるいは男女間にある理解しがたい〈他者性〉の存在をあぶりだす装置ともなっている。

女達は誰にも見られていないと思ひ、斎場の廁の中で化粧をしている。「私」もひそかに自分の家の廁の窓から斎場の廁の中を

覗いている。両者の間にコミュニケーションは成立しない。両者の間の〈通約不可能性〉¹⁶の象徴が、斎場の厠と「私」の家の厠の間の隔てとなっている。だがエマニュエル・レヴィナスのいうように、愛が融合的・対称的な関係の中ではなく、通約不可能なものとの関係の中から生まれるものだとするれば¹⁷、「化粧」はあるいはそれを生きようとする場を用意したといえよう。「化粧」は、「私」が人間存在そのものに対して抱いてきた「悪意」が払拭される物語ではなく、通約不可能な自他の関係を確認し、逆に〈他者性〉を介して生きていくことをうながす物語となっている。

ところで〈想像界〉から〈象徴界〉への移行¹⁸が、エディプス・コンプレックスの意識が主体に芽生えることによつて行われるというジャック・ラカンの精神分析的な知見を参照するなら、「化粧」の「私」が、女たちを〈聖女〉と見なそうとする思いと、「斎場の厠」に男を登場させない点で、川端が自己形成の過程でもつことが出来なかつた母の愛を「若い女」に期待し、〈母子融合状態〉にある〈想像界〉の再現を願いつつ、その幸福を阻止するかも知れない男の存在を未然に物語の外に押し出していたと読める。「化粧」は〈想像界〉の甘美な時間を体験することなく〈象徴界〉へと移行せざるをえなかつた川端が、フィルムを逆戻しするように、父を除外し、母との融合状態へ回帰していこうとする物語だと考へることもできそうである。「私」は外に向かって身を開いていこうとするのではない。内に向かって失われたものを探しつづけるのである¹⁹。

青柳悦子は「主体と対象の消失以後」も「相互嵌入の事態だけは存在しつづける」²⁰哀しみについて語っているが、「化粧」の「若い女」も死者との生前のつながりから来る〈相互嵌入〉を気配として感じていたからこそ身体的な感覚として残りつづけるその気

配を振りすてようと厠のなかで化粧をしていたのかもしれない。女達は自身の唇に触れることであらためて生の実感を感じとっていたのである。だがそれに対して「私」は見るばかりである。見ることは対象に触れることではない。安全圏にいないことである。しかも見ることは、世の中を〈見るもの〉〈見られるもの〉の二つに分ける。分割することによつて自然状態が崩壊する。

〈母子融合状態〉の再現を願うなら、「私」は見ることをやめて、厠から外に出るべきであつた。物語の前面にあきらかに示されたテーマではなく、それとなく示され、ある感覚的な表象を通して、物語の全体構造を明らかにするものをテーマ批評²¹は探すが、「化粧」の中からそれを探すとすれば、カナリアの働きがそれにあたろう。放鳥の儀式のあとそこに残りつづける、死者を悼みつづけるカナリアは、「十七八の少女」に託した「私」の期待を具現するイメージとなっている。だが斎場の非日常的空間でも「私」の家の日常的空間でもなく、厠と厠の間の空間へと移動するカナリアの運動に注目するなら、カナリアは飛翔が沈黙につながる深い哀悼の意をもった静止であると同時に、「私」に厠を出ることをうながす象徴的存在となつていたとも推測される。

にもかかわらず「私」は動こうとはしない。見るばかりである。これはどういうことか。「私」には見ることしか出来なかつたのではない。「私」は〈想像界〉の〈母子融合状態〉がもつ〈相互嵌入〉の感覚を持つことができなかった。そのため人とのコミュニケーションや触覚的感覚によつてではなく、見ることによつてしか自己形成を図るすべがなかつた。それが「私」の、ひいては川端文学の宿命的な文学の方法であつた²²。川端文学は、ダイアローグ的な話し言葉の中よりも、モノローグとしての書き言葉のなかに自己形成をうながす道を見いだす。人との会話を避ける「禽

獣」の「私」も同じである。「私」が見ることによってしか自己形成できなかったとすれば、廁ではない第三の空間へ行くカナリアは、「私」の見はてぬ夢の成就であったのかも知れない。

四 テクストの〈政治性〉

川端康成は「化粧」のテキストを、男／女の関係、見る／見られるの關係に置き、さらに登場する女性達を「魔女」と捉え、そうあつてほしくないと思う願望の持主を男性に置くことで、男／女の關係を、清浄無垢を志向するもの／魔女を志向するものといった役割にふりわけける。こうした役割の傾向化は、男／女のあべき役割を結果的にであれ流布させる意味で、フェミニズム批評がこうした構図のテキストを批判してきたように、「化粧」を批判の対象にさらす可能性をもつ。フェミニズム批評をおこなう立場で「化粧」が与える社会的機能を強調するものは、こうしたテキストは、女の側のあるべき自由や権利を切りすていていると指摘することができよう。また社会的文化的につくられた男女の役割を考えるジェンダー批評をおこなう立場にたつものは、個人の癒しがたい願望を掘りさげていく「化粧」の「私」の生きかたに、ひきこもりの社会現象に見られるような、内向きになる男の社会的な傾向性を重ねみるかも知れない²³。

フェミニズム批評やジェンダー批評のように、テキストが読み手に与える社会的影響（権力の行使のように、なかば暴力的に読み手に与えられる社会的影響を以下とくにテキストの〈政治性〉と呼ぶことにする）を重視する態度は、テキストが持つ〈文学性〉をとくにないがしろにする意味で危険だが、物語の巧妙な機構や芸術的完成度といった〈文学性〉のみを大事にする態度も時代的

なイデオロギーに基づくものであつて、芸術的価値を優先させてきた結果、物語内容がもつある種の偏向を看過し、社会に流通させる事態を招いてきたことに無自覚であつた。テキストの〈文学性〉に目を向け、〈政治性〉に関心を寄せることがなかった従来の研究状況を考えるとき、テキストの社会的機能に目を向けることは、芸術的完成度を盾に、あるイデオロギーを世の中に植えてきたかも知れぬ態度に反省を求める意味で意義がある。

「化粧」に示されたものは、必ずしも男／女のあるべき役割を固定させるものではなく、むしろ男／女の哀しい本質が開示されたものだという解釈に私は賛成する方だが、テキストが読者の生き方の方向性を制約していることを理由に、いろいろな批評的視座を読者が獲得することは自由である。しかし〈政治性〉の点から解釈を進展させようとするとときに大事になってくるのは批判の方ではない。テキスト批判は、解釈とはなじまないからだ。テキストがもつ豊饒な意味作用を前に、読み手はあれこれ読んでいくとする。テキストがもつ社会的機能の新たな掘りおこしは、テキストの〈文学性〉に目を奪われていた読者に新たな読みの視点を提供する。われわれはフェミニズム批評の歴史が経験したように、女性の自由を束縛したり、生き方を阻害しているという意味で作品や作家を批判することから、作品の中に時代を生きる女性のリアルな姿を読みこんだり、作品が時代をコントロールするありよう、性差の問題がメタファーとして機能する歴史的文化的状況を分析する方向のなかで、テキスト解釈を探っていく必要がある²⁴。テキストのジェンダー分析はその一例にすぎない。テキストがもつ種々の社会的機能を冷静に分析することが必要である。

テキストの社会的機能にどのような時代的な意味が刻印されているかを検証する研究は、だがともすると文学テキストの社会的

機能をもとに、社会のありようを説明する文化研究にスライドしていく傾向があった。文化研究がもたらした、文学テキストの社会的機能のとり出し方は文学解釈の参考になるが、テキストの社会的機能を、文化状況を説明するための手段や道具にするのは豊かな意味作用をもつ文学テキストの可能性を削ぐ意味で文学研究のためには不幸なことである。文学テキストの社会的機能に注目しつつ、それをもう一度テキスト解釈の問題に還元することが必要であろう。しかもその還元が「文学性の追認とは異なるかたちで意識化」²⁵されるような形で。テキストの〈政治性〉について考えようとするときに問題となってくるのは、マイナーへの注視であり、それへの共感である。テキストは〈開いた物語〉として最初からあるのではない。読み手がテキストの中に眠っている意味の多様性に注目し、マイナーなものに対する注目を与えていくことがテキストを〈開いた物語〉にする。

具体例に戻ろう。「化粧」には「私」の目をとおした女性の姿が刻印されている。それにより街頭や客間の女の化粧に心を動かされてきた男達の一つの気づきを与えられる。また女性達は化粧を通しておこなってきたひそかな生のエゴイズムの所在を知らされる。もちろん斎場の厠で化粧する若い女の姿がエゴイズティックであるがゆえに人間的で、逆に隠れて斎場の厠をのぞいている「私」の姿に非人間的な冷たさを見る読み手もいるし、女性に魔女的な姿しか見ようとしないう「私」の態度にフェミニズム批評の必要性を感じる読み手もいよう。川端文学の美学に共感するものもいれば、しないものもある。後者の読み手はテキストを放りだすだろう。しかしテキストに目を通した者の多くは、川端のあの目のように、真理を見すえる冷たい目を持たされる。「確かな仕合せ」と「女に対する悪意」の両方を見すえる目を持た

される。川端文学の目の感染力はそれほど強い。

最後に真理を見すえる冷たい目の周辺にある、川端文学の社会的機能を二点つけ加えておきたい。第一はいわばこのテキストに〈遊び〉がないことである。第三の選択肢といったものをもたず、すべてが二項対立で整理される以外にない認識のタイプこそ、読み手に与える大きな社会的機能といってよい。こうした思考態度は、いかにも近代的思考のタイプといってよい。なるほど「私」は内なる〈他者性〉に引きずられている。しかし、そうした「私」の〈他者性〉が〈他者性〉として「私」自身に捉えられ、カオスと折り合いをつけていこうとする姿勢はみられない。「私」の無意識は〈母子融合状態〉を希求しつづける。その思いは変わらない。そして一方の女性が〈通約不可能性〉をもつ〈他者〉であることにはかわりはない。〈他者〉を前にして「私」は一步も譲らないのである。

第二は規範意識の授受である。今日、電車の中で化粧に没頭する若い女性の姿がよく見られるようになったが、それは他者への敵意というより、衣服の着替えと同様、化粧が隠れておこなうものであった文化状況から、公の面前で行われても何のてらいもない文化状況に変わったことを意味している。文化的規範がなくなれば、化粧が公衆の面前で行われようと罪の意識は生じない。そのような今日の状況から「化粧」の「若い女」の化粧を捉えてみると、斎場の厠の中で行われる化粧が魔女の仲間入りをすることだと考える規範意識も道徳的な意識がはたらかない文化状況では意味をなさないことが理解される。「隠れて悪いことをしてゐる」と「私」が思う「若い女」の意識こそがテキストの社会的機能を構成する大事な一節である。「化粧」は化粧の行為に付随する規範意識の物語である。テキストは規範意識を読み手と共有し、確

認しあう。何がよくて、何がわるいのか。テキストのなかに提示された規範意識のなかに否応なしにわれわれは住まわされる。テキストを背後で支配しているコードはつねにわれわれをある規範意識に服従させるのである。

注

- 1 「文学の研究ではしばしば無視されるものの、次の二種類の研究方法には基本的な区別がある。ひとつは、言語学をモデルにして、意味を説明されなければならないとし、どうしたらそれが可能かをさぐるうとするもの。もうひとつは、反対に、形からはじめて、それを解釈し、形が本当のところは何を意味しているのかを解こうとするものである。文学の研究に置き直すと、詩学と解釈学との対比ということになる。」(ジョンサン・カラー『文学理論』荒木映子・富山太佳夫訳 二〇〇三年九月 岩波書店 九一―九二頁)
- 2 「上越教育大学研究紀要」平成一七年九月。なお「川端康成「化粧」の表現機構」(「上越教育大学研究紀要」平成九年三月)において用いている研究方法の多くは、国語教育の中で学ぶ伝統的読解方法である。
- 3 前掲書『文学理論』(九二頁)
- 4 土田知則・青柳悦子共著『文学理論のプラクティス―物語・アイデンティティ・越境―』(二〇〇一年五月 新曜社)
- 5 ジュリア・クリステヴァの用語。テキスト相互関連性とも。あらゆるテキストは他のテキストを吸収・変形させたモザイク模様をした引用の織物だとクリステヴァは言う。
- 6 シェイクスピアに対するエリオットの影響については、前掲書『文学理論のプラクティス』「影響関係を脱構築する」(土田知則)の項目中で、デイヴィッド・ロτζジの小説中の言葉として紹介されている(一九九頁)。
- 7 バーバラ・ジョンソン『差異の世界』(大橋洋一・青山恵子・利根川真紀訳 一九九〇年七月 紀伊国屋書店 「マ(ル・)ラルメの華―相互テキスト性についての考察―」二一四―二一五頁)なお「影響の不安」はハロルド・ブルームの用語(『影響の不安』小谷野敦訳 二〇〇四年九月 新曜社)。ジョンソンは二一五頁で次のように述べている。「もしテキストを、ダイナミックな相互テキスト性の観点から読むとすれば、このときテキストは、これまでとはちがった相貌をみせ、そこから、テキストにエネルギーを充填し、テキストを横断するさまざまな諸力や欲望があるみにだされるだろう。そのような力、そのような欲望は、テキストを、独立した均質的なメッセージ単位として、つまり全体化できるシニフィエの集まりとしてみる場合には、決して見えてこないし、なかなか読むこともできないのである。」
- 8 石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織『読むための理論―文学・思想・批評』(一九九一年六月 世織書房)
- 9 「脱構築」の項目(島村輝)一七三頁
- 10 「文芸春秋」昭和七年四月号に「短編集」と題して、「顔」「化粧」「妹の着物」の三篇が発表された。
- 11 「メタ性」は、ここでは物語られた内容自体を相対化する語り手の言説あるいは後続作品のこととして用いる。「化粧」の語り手「私」の態度にそれは見られるし、「禽獣」の作品に「化粧」の物語を相対化する態度が見られる。
- 12 「街頭や客間の女達の化粧からも、葬式場の廁のなかの女を思ひ浮べるやうになれば、それは確かなしあはせにちがひない。」と思う「私」は、その後、「その窓が私に植ゑつけた女への悪意

が、彼女によつてきれいに拭ひ取られてゆくのを感じ」る。

12 〈他者性〉は、精神分析学や社会学の用語。主体には理解できない相手の了解不能な側面の意。「私」の内なる〈他者性〉は、

「私」の無意識の領域にあるもの。

13 ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』の語りのありようは、前掲書『文学理論のプラクティス』「小説的思考における他者との融合」の項目中で紹介されている。「私」（＝語り手）は登場人物たちとは異なる水準に位置づけられている。「私」は物語世界内に生息し行動する人物ではなく、彼らを眺め、思考の対象とする、別の次元の存在者として規定されている。（五七～五八頁）

14 〈トランスパーソナル〉は、個を超える、の意味。現代に起きているさまざまな問題には、合理主義や科学主義、個人主義の限界が映し出されているとし、個を超えたある種のつながりに問題の新たな解決策を見いだそうとする考え方。

15 土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『ワードマップ現代文学理論―テキスト・読み・世界―』（一九九六年十一月 新曜社）「対話あるいはテキストの多声性」の項目（土田知則）一六三頁

16 同前。「テキストのなかの他者性」の項目（土田知則）二〇二頁。〈通約不可能性〉は、主体と〈他者〉とのコミュニケーションに生じる理解不能なもののこと。〈他者〉との完全な融合はありえないと考える立場にもとづく。

17 同前。「テキストのなかの他者性」二〇二頁。レヴィナスによれば「一見平穏に見える融合的・対称的な愛の関係は、「他者」の声を封じ、「他者性」という通約不可能なものを自己同一的な思考の枠内に押さえ込もうとする関係に他ならない」という。

18 〈想像界〉（象徴界）は、ジャック・ラカンの用語。ラカンが人間の成長過程として、生まれた子どもは母と子の未分化な状

態（想像界）から父の介入（法・掟）によって切り離され、言葉の世界（象徴界）へ参入していくという。フロイトの提唱したエディプス・コンプレックスは、この父の介入を大きな抑圧と捉え、母と子の未分化な状態である〈想像界〉にとどまろうとする心的メカニズムのこと。

19 ルネ・ジラルルの欲望理論にもとづいて「化粧」を捉えるなら、「私」が関心を向けている「若い女」や「十七八の少女」は、それぞれ「私」の「妻」と「妻の妹」に抱く意識を「若い女」や「十七八の少女」に差し向けていたのではないかと推測させる。そう読めるなら「化粧」はジラルルのいう〈ロマンティックの虚偽〉ではなく、〈ロマネスク小説〉として読める要素をそなえていたことになる。母子融合状態への回帰は、〈聖女性〉をもっている「私」が期待する妻の妹のイメージと重ねられること、でいっそう現実味がます。

20 前掲書『文学理論のプラクティス』「あるようなないような」の項目（二二頁）。メルロ＝ポンティは主体と対象は相互連携的な「含みあい（相互嵌入）」の関係にあるという。主体にとって対象の知覚は「客観的な」知覚ではありえず、知覚するといふ出来事の中で主体が変容させられる。「ひとは対象に触れるとき、対象の感情を分有させ、また対象に堆積されてきた感情をこそ受けとる」（二二六頁）と青柳は述べている。

21 テーマ批評については前掲書『文学理論のプラクティス』「鳥」と「色彩」のテーマティスム（土田知則）参照。

22 川端康成の母は川端が三歳のときに亡くなっている。なお、川端の父は川端が二歳のとき、祖母は七歳のとき、祖父は一五歳のときにそれぞれ亡くなった。

23 「化粧」のテキストにおいては、「女」は複数で扱われていることから女性一般を表すにしても、「男」の方は「私」の見方であっ

て男性一般の問題にまで敷衍することには無理があろう。「化粧」は「私」の願望の物語として読まれるべきであろう。「私」の願望の物語としてとらえた場合、「化粧」は「魔女である存在を見る」↓「魔女である存在を見たくない」↓「聖女である存在を見る」↓「聖女である存在ではないくなる」の流れをたどって再び冒頭にもどる、A・J・グレマスのいう記号論的四角形を充足する物語となる。

24 飯田祐子「文学とジェンダー分析」（上野千鶴子編『構築主義とは何か』二〇〇一年二月勁草書房）参照。

25 同前。九一頁。

New hermeneutics research on *kesyo* by Yasunari Kawabata.

Yuji ONO *

ABSTRACT

Is there a new method other than the traditional interpretation method of reading the meaning and the background of words? If it is possible to mention the width and depth of hermeneutics research, via the fact that effectiveness and general purpose of new research method are known, manner of our approaches which it tries to interpret the text probably will change.

In this research, new hermeneutics research method was adopted for the text of Yasunari Kawabata "*kesyo* (make-up)", reading of the text was shown.

* Division of Languages: Department of Japanese Languages